

直前東大国語発展演習

【1 回目】



【問題】

【一】 出典…竹田青嗣『意味とエロス』／オリジナル問題

ポイント

「現象学的還元」という、現代における認識論の基本を語った文章である。本文の展開は比較的とらえやすいはずなので、内容・構文・表現について、答案の記述の正確性を追求する練習としてもらいたい。

解答

(一) 主観に左右されることがないはずの客観存在について、その捉え方の妥当性の点で対立や抗争が生じるから。

(二) 絶対的秩序や法則が内在する客観存在を想定することによって、唯一無二の正当な世界観の存在が必然化してしまうこと。

(三) 客観存在の内在的な秩序や法則性との対照によって、個々の主観の捉える客観的世界の差異は完全に説明可能だということ。

(四) 客観的世界の存在は、その態様の如何に関わらず、原理的に主観によってのみ把握しうるものだから。

(五) 個々の欲望や身体性を前提とした主観の上で対象を認識する以上、人間の把握する客観的世界の秩序や法則は、主観と隔絶し独立した存在ではあり得ず、個々の主観の捉えた世界像の共通部分を相互に了解し、それを確信することによってのみ構成されるということ。〔120字・解答例〕

(六) a ≡ 懐疑

b ≡ 転化

c ≡ 肝要

d ≡ 背理

(一) 傍線部の理由説明の設問であるが、傍線部は、「〜とは、したがって〜を意味する」という構文である。ここの「したがって」が承けている内容が「理由」に相当するだろうと考えられる。それは直前の、「意見の正しさといったものは、必ず対立し、抗争する。形而上学の〈主観〉―〈客観〉という素朴な問題設定が底に潜めているのは、じつはこの問題である」(5〜6行目)という部分であるが、ここの「形而上学の〈主観〉―〈客観〉という素朴な問題設定」が傍線部の「〈主観〉―〈客観〉を見出す」に対応し、同時に一つ前の段落の「〈客観〉存在の確実性を確認しようとする形而上学の根本的なモチーフ」(2〜3行目)とも対応する。この叙述を含む一文に、「形而上学の根本的なモチーフは、人間の日常生活で、つねに『あいまい』なものと確実なものとが入り混って存在し、ときにどうしても見方(意見)が対立するという事態から生じたものにほかならない」とあることから、「見方(意見)の対立」の存在が、傍線部の「理由」ということになる。あとは傍線部が「〈主観〉―〈客観〉の一致(真理)」＝「唯一無二の正しい意見(世界観)」の存在の確証を語る内容であり、その「理由」を要求されているという点に鑑みて、「客観存在」について「主観」にかかわりなく存在しているものだ(つまり「存在の確実性」ということを明示し、その存在について「見方の対立」が生じることを理由とする形で答案を書けばよい)。

(二) 傍線部を含む一文が、「……アポリアは、その次にやってくる推論によって避け難いものとなる」となっている点に注意。ここでいう「推論」は直後の一文に、「この世界の客観存在は、それ自体独立した絶対的な秩序や法則を内在的に持っているはずだ、という推論」(25〜26行目)と説明されている。この「推論」によってもたらされる「認識論上のアポリア(難問)」とは何か、と考えればよい。「推論」について、直後から「この推論は、次のような考えを意味している」云々とその内容について述べたあと、「こうして『世界はたったひとつしかない』という不可疑性は、『世界はそれ自体で絶対的な秩序や法則を持ち、したがってそれは理性によって捉えられるはずだ』、という『客観的真理』の理念へテンカされる」(32〜33行目)とある。これは傍線部アの「ほんとうは唯一無二の正しい意見(世界観)があるはずだ」という考え方と同じ内容であるが、傍線部アの直後で「わたしたちは現在、こういう考え方に對して即座に否を言うことができる」(8行目)と否定されている「考え方」である。つまり、「推論」にしたがって考えてゆくと、誤った「考え方」に帰結してしまうことが、「認識論上のアポリア」の内容である。以上を整理すれば、「推論」が必然的に「唯一無二の正しい世界観の存在」を導き出す、という形の答案となるだろう。

(三) 前問の解説で記したように、この傍線部は「推論」の内容について述べられた部分にあるので、基本的にはその説明の範囲内で考へるべき設問である。すぐわかるように、傍線部はその直前の「客観存在が持つ……諸差異を説明する」(28～29行目)と対応する内容である。「推論」の内容についての説明が、「主観」の視線の位置が同一でないから「客観」がさまざまな異なった現われ方を示す(「意見の対立」)、「主観」の視線の位置を全く同一点に置くことはむろん不可能なので「客観存在が持つ絶対的な秩序や法則をまず擱み当てることによって、諸主観に現われる客観」の相の諸差異を説明すること」が問題だ、という論理になっている。したがって傍線部の「主観」に現われる世界像の諸差異」とは、「説明」すべき「個々の主観の捉える客観世界の差異」であり、「全く誤つことのない交換式を得る」はその「説明」が完全に可能であることを意味することになる。そして「客観的構造の概念」とは「客観存在の秩序や法則」であり、これが「絶対的」、つまり「主観」の視線の位置」とはかわりなく存在しているはずのもので、それを基準とすることによってそれぞれの「主観」に現われる世界像の諸差異」が説明できる、ということになる。

(四) 34～35行目に「カンヨウなのは、『それ自体で絶対的な秩序や法則を持つような客観存在』とは、決してあり得ないものだ」という記述があるが、これが傍線部と対応する記述であることに気付けば、その次の段落の「ものの存在はその内在的な……」以下の説明と、傍線部直後の「このことをもうすこし考えてみよう」の後の例示(カップ)の内容から答えが出せると判断できるだろう。「それ(「ものの存在」)が内在的な秩序や法則として規定されるのは、ものが主観にとって、諸性質、形状等々として現われるから」(37～38行目)、「世界の存在(あること)は、主観にとってのみ……諸主観に現われ出る世界」の、現われ方の共通項」(42～44行目)、「事物の存在のありようは、主観の(身体)や(欲望)によってかたちを変える」(54～55行目)などの記述を見れば、「客観的」世界」やその「内在的な秩序や法則」とは、主観に捉えられることによって存在するものであり、それ以外のものではないということである。これが傍線部の「ロジカルには無意味」という判断の根拠である。

(五) この設問に限ったことではないが、傍線部の内容説明では、傍線部の中でどの部分を具体化して説明しなければならないかを検討する。この場合は「帰納」されつつある」と「その逆」の二点が最も重要なポイントであろう。ここでいう「帰納」と「その逆」とは、「諸主観」に現われ出ている世界の相から」という修飾句があることから、43行目から46行目にかけての「客観世界の秩序

や法則とは、それ自体として存在するものではなく、諸〈主観〉に現われ出る〈世界〉の、現われ方の共通項」「客観世界とは、本質的に、相互主観的関係の網の目の中に浮かぶ、唯一同一の世界、という信憑の像」「この相互主観性それ自身も、結局〈意識〉のうちの信憑の構造」という記述から具体化すればよいことになる。また、注意が必要なのは、この部分で語られている「主観」について、その前の段落で、「〈主観〉とは、単なる意識の座ではなく、〈欲望〉や〈身体〉として世界に向き合っているいわば存在要請の座」(38～39行目)「〈主観〉が、〈欲望〉や〈身体〉として存在していることによって、事物は、諸性質や形状等々として〈主観〉に現われ出る」(39～40行目)などと書いてある点だ。「諸〈主観〉」の「共通項」が問題になる以上、「諸〈主観〉」自体に差異が存在するはず(だからこそ世界観にも差異が生ずる)であり、「世界」を捉える「諸〈主観〉」が「欲望」「身体」を前提としたものであることも記述する必要がある。

【配点の目安】 配点55点 (一) 6点 (二) 8点 (三) 10点 (四) 10点 (五) 17点 (六) 各1点×4＝4点

(一)

〈ア主観に左右されることがないはずの客観存在について、イその捉え方の妥当性の点で対立や抗争が生じるから〉…6点

※ア3点、イ3点

*アは「客観存在」が主観から独立していることを押さえれば可

*イは「客観存在」の捉え方の妥当性に関する対立・抗争が発生することを押さえれば可

(二)

〈ア絶対的秩序や法則が内在する客観存在を想定することによって、イ唯一無二の正当な世界観の存在が必然化されてしまうこと〉

…8点

※ア4点、イ4点

*アは「アポリア」の端緒となる「推論」が、客観存在に内在する絶対的秩序・法則の想定であると示せば可

*イはアの論理的帰結として、唯一無二の正当な世界観の必然化が起こることを押さえれば可

(三)

〈ア客観存在の内在的な秩序や法則性ウとの対照によって、イ個々の主観の捉える客観的世界の差異ウは完全に説明可能だということ〉

…10点

※ア3点、イ3点、ウ4点

*アは「客観的構造の概念」が客観存在の内在的な秩序や法則性であることを押さえれば可

*イは「主観」に現われる世界像の諸差異」が、個々の主観が捉える客観的世界の差異であることを押さえれば可

*ウはイをアとの対照で完全に説明するという関係性を示せば可

(四)

〈ア客観的世界の存在は、イその態様の如何に関わらず、ウ原理的にア主観によってのみ把握しうるものだから〉…10点

※ア4点、イ3点、ウ3点

*アは「客観的世界の存在」が主観によってのみ把握可能であることを押さえれば可

*イは「客観的世界の存在」について、「主観」ごとの現われ方は多様であることを押さえれば可

*ウはアが「原理」の問題であることを押さえれば可

(五)

〈ア個々の欲望や身体性を前提としたイ主観の上で対象を認識する以上、ウ人間の把握する客観的世界の秩序や法則は、主観と隔絶し独立した存在ではあり得ず、エ個々の主観の捉えた世界像の共通部分を才相互に了解し、それを確信することによってのみ構成されるということ〉…17点

※ア2点、イ3点、ウ4点、エ4点、オ4点

*アは「主観」を構成する「身体性」・「欲望」を両方押さえて可

*イは対象の認識は主観によることを押さえれば可

*ウは客観的世界の法則・秩序について、主観と隔絶・独立したものではないことを押さえれば可

ポイント

説話系の文章は東大でも繰り返し出題されてきている。この手の文章は大筋をつかむのはさほど難しくないが、それだけに出題者としては細部の読みとりが恣意的なものになっていないかを確認するための設問を施したくなるものである。全文に対する目配りが重要である。また、東大の問題で文中の和歌が見逃されることはまずない。これを機に、和歌の解釈の標準的な手順《詞書↓句切れ↓修辭技巧》を確認しておくといよい。

現代語訳

去る（陰曆）八月の初めのころ、西山の西住上人といっしよに、難波（＝現在の大阪市とその付近）のあたりを通り過ぎましたところ、ちょうどそのころは日和が格別にうらうらとして、風もおこりませんから、（難波江（＝大阪湾一帯）ではたぐさんの）釣舟が波間に浮かんで、木の葉（を海面に散らしたか）のように見える。「（おおぜいの漁師たちが今ごろ）どんなにたぐさんの魚を釣っていることだろうか。なんとまあいたましいことよ。さあさあ、そのあたりの舟に（でも）乗って、あの（釣り上げられて死んでゆく）魚たちのために念仏をとなえて、（魚たちの）来世の成仏を祈ろうよ」と言うと、「まったくそのとおり、そのように（魚たちのために念仏）するのがよろしい」と（いうことになつ）て、遠浅（の入り江の中を沖合に向けて）ずっと遠くまで歩いて（舟に）近づいて、「舟に乗せてくだされ」と言うと、（その舟の漁師は）「こ（の舟）は漁船で（渡し船やないさかい）よそへ行くわけにはいかんのや。（お坊さまがたが）乗らはっても何の役に立ちまっしゃるか（、いいえお役にはよう立ちまへんで）」と言う。（しかし私たち二人は）無理に（乗りたいと）言って乗ってしまいました。そうして、魚たちのために（漁師が気を悪くしないように）こっそりと念仏をとなえて、（魚たちの）成仏を祈ったことでした。（さて、漁師が）あちらこちらの海岸に寄って、漁をするのを見ておりますと、（その様子に心動かされて）なんとなく

難波人……難波の（海の）漁師は、どのような因縁で（殺生を続けながら、）どここの入り江で浮かばれない最期を迎えることだろうか

と（私が）口ずさみましたので、この（私の横にいた）西住上人が付け句をしようと頬杖を突いて、（うまい下の句を考えようと）苦

吟しておりましたところ、(その舟で) 漁をしている老人でたいそう年をとっている(漁師)が、だしぬけに、

あふことなみに……(恋しい人に) 逢うこともないので、(波に浸される濡標ではないが、恋の思いに) 身をひたすら沈めて悩み
悩んでいるうちに。そして同じように(仏の縁に) 出会うこともないので、波(のまにま)に(俗世の)身(の悩み)をすべて
味わい味わいしながら

と付け句をしたので、(こんな田舎の漁師ふぜいに連歌の嗜みがあったとは) 珍しいことだと思わずにいらなくて、(隠れた歌の名人
の) 舟にうまいこと無理強いに乗り込みまして、こんな思いがけない和歌の文句を耳にした嬉しさよと思うこと(といえば)、ほかに
たえようもない。(ちなみに) その(ときの漁師だった) 老人は、現在ではすっかり漁をやめて、連歌に熱心になっております。(そ
れはさておき話を戻して) 老人の句の趣深さに(触発されて)、(私も) かさねて(歌の文句を) 思いついたので、

舟のうち……(魚釣りをする) 舟の中や(貝採りに海に潜った) 波の下で(日々を送るうちに、ふと気が付けばこんなにも) 年を
とってしまったことだ

と(私が) 言ったところ、(漁師は) ふたたびちょっと考えて、

海人^{あま}のしわざも……(板子一枚下は地獄と言われる) 漁師の仕事も、せわしない俗世(の営みに過ぎないの) だなあ
と朗唱したことでした。

〔訳註〕 ○難波人いかなるえにか朽ちはてん……「えに」は「縁に」と「江に」との掛詞。

○あふことなみにみをつくしつ……「なみ」・「みをつくし」は、歌意上の表の意味はそれぞれ「無み」・「身を尽くし」だ
が、「波」・「濡標」を掛け、また「難波」と縁語になっている。

○海人のしわざもいとまなの世や……「いとまな」の「いと」に「糸(釣り糸)」、「まな」に「魚」の意を含ませて「海人」
の縁語となっている。

解答

(一) アⅡ多くの魚がなんと痛ましいことよ。／なんとまあ魚たちがかわいそうなことではないか。〔別解例〕

イⅡあなたがたが私の舟にお乗りになってもお役には立ちません。

カⅡ漁師の仕事もなんとも忙しい俗世の生業に過ぎないことだ。

(二) 西行の句に付け句をするために、西住上人がしきりに考え込んでいるということ。

(三) 仏縁に出会うこともないので、難波の滯標ではないが、波間に身を沈めて俗世の苦しみをすべて味わい味わいしては、仏縁に逢うこともできないので、波間の滯標のように、我が身をいたずらに滅ぼしていつて、「Ⅱ別解例」

(四) たまたま乗り込んだ舟の老いた漁師が、修辭技巧を駆使した付け句をするほどの連歌の素養を備えていたことに驚いたから。

解説

(一) アⅡ傍線部を品詞分解すると、「あら(感動詞) + 無慙(形容動詞語幹) + や(終助詞)」となる。

文法的な注意点として、傍線部が《感動詞+形容動詞語幹+終助詞(詠嘆)》となっていることが挙げられる。形容詞・形容動詞は《感動詞+語幹》の形で詠嘆表現となるので、それにふさわしい訳語を補っておくこと。

語義の面からは、「無慙」は「むざん」と読み、形容動詞「むざんなり」の語幹である。現在は「無残・無惨」と書かれることが多いが、語源的には「無慙」の用字のほうがふさわしく、「(仏教的に) 恥知らずであること」が原義で、「(1) 悪行の自覚のないこと・(2) 無法乱暴であること・(3) 残酷で痛ましいこと・(4) 気の毒でかわいそうなこと」などの用法がある。ここでは、「魚たちのために念仏しよう」という意思のもとになる感情を示していることから、語義としては前記の(3)・(4)の意味が訳出されればよい。ただし、「残酷」だけでは漁師に対する非難となつて不適。念仏するときの西行らの態度には、宿世によって殺生を重ねざるを得ない漁師への配慮が読みとれる。魚に対する同情に集中した答案が望ましい。

イⅡ傍線部を品詞分解すると、「乗り(動詞) + たまひ(補助動詞) + て(接続助詞) + 何(名詞) + の(格助詞) + 用(名詞) + か(係助詞) + 侍ら(動詞) + ん(助動詞)」となる。

文法的に目立つのが「か」と「ん」とで《係り結び》の表現となつていて、《疑問》か《反語》かの判別が必要となる。ここではその後に直接的な返答が記されていないことから《反語》の用法と判断するが、《形式疑問+実質否定》をすべて書こうとし

て「くであろうか、いや／＼ない」などとしていては解答欄から溢れて（後述する要素も補えなくなつて）しまうため、《否定》文として訳出する。

文法的注意点の第二は《尊敬語補助動詞「たまふ」》の訳しかたにある。基本的に「おくになる」を用いる。また《丁寧語本動詞「侍り」》も訳し忘れないこと。こちらは「です・ます・ございます」でよい。

解釈的注意点として、「乗る」は《不完全自動詞》で《主語「くが」・補語「くに」》を必要とすることを見落とさないこと。傍線部を含む節の中に出ていれば補う必要はないが、設問部ではどちらも省略されているので、補っておかないと減点の対象となるだろう。（なお、主語は複数であることが分かるように書くこと。）

解釈的注意点の第二は、「用」の処理である。機械的に訳すと「お乗りになつて、どんな用事があるのですか」などとしてしまいそうだが、魚撈（すなわち殺生）とは無縁のはずの出家が舟に乘ろうというのだから、漁師としては「渡し船と勘違いしたな」と思ったはずだ。とすれば用事は「舟でどこかへ連れて行くこと」だが、傍線部直前で「それはできない」と言つたあとのことだから、ここの「用」は「役立つこと」の意であると解釈する必要がある。

さらに、右に付随して接続助詞「て」にも目を配る。本来は《単純接続》の助詞だが、それだけにさまざまなニュアンスを含むことがあり、ここでは後半との釣り合いを考えて《逆接仮定》のニュアンスで訳出することになる。

力Ⅱ傍線部を品詞分解すると、「海人（名詞）＋の（格助詞）＋しわざ（名詞）＋も（係助詞）＋いとまな（形容詞語幹）＋の（格助詞）＋世（名詞）＋や（終助詞）」となる。品詞分解の段階で気を付けたいのが、ここの「いと」は副詞ではないということだ。ただしこれは、落ち着いて考えれば後に用言がないことからわかるはず。とすると、「いとまな」とは何かということになるが、これは形容詞「暇無し」の語幹である。

文法的には、《形容詞語幹＋「の」》の形に注意。これは《形容詞連体形》と同じく連体修飾するが、詠嘆の気分を含んだ強調表現である点に注意して訳出すること。

訳語選択上の注意点として、「海人」・「しわざ」を挙げておく。「海人」を「あま」と訓むことは基本的な知識だろうが、現代語では通常は使われなくなっている。また「しわざ」は現代語にもあるが、現代語のニュアンスでは「とんでもないこと・困ったことをしてくれたな」といった状況にふさわしくなつてしまっている。どちらも適切に言い換える必要がある。

解釈上の注意点としては、「世」が挙げられる。これは非常に意味の広い言葉（各自、古語辞典で再確認のこと）だが、漢字で書

かれると先入観にとられやすくなる。ここでは「男女の仲」ではないし、「世の中」でもない。主語「海人のしわざ」との関係から、まずは「人の一生」といった方向性をおさえておく。さらに、傍線部の句の前提となる上の句「舟の中、波の下にぞ、老いにける」の意味と、これを発したのが出家である点とをあわせて、傍線部は「無常を嘆く気持ち」を含んでいる点を読みとりたい。

(二) 傍線部以前の流れを確認すると、「西行が五・七・五の文句を口ずさんだ」ことが書かれている。問題文の成立した鎌倉時代前期には、和歌と言えば短歌が主流だが、これを「本^{もと}＝上の句」と「末^{すえ}＝下の句」とに分けて二人で合作する「連歌（短連歌）」も盛んに行なわれた。連歌では先に本末のどちらができてよいのだが、「本」に「末」を続けること、あるいは「末」に「本」をのせることを「付ける」と言う。傍線部の少し前の「つけんとて」がそれを示している。さらに傍線部直前には「顔づえをつきて」とある。「顔づえ」は本来は「面つゑ」と書くべき語で「つらづえ」と訓むが、現代の「ほおづえ」にあたることは字面から判断できるはずだ。これらを総合するに、「和歌の文句を考えながら頬杖を突いている」のだから、「うめく」といっても肉体的な苦痛があるわけではない。「苦吟」しているのだということになる。

設問では理由の説明も求められているが、これは先に見た「つけんとて＝付ケヨウトシテ」が解釈できればそのまま変形して使える。ただし、東大ではこの設問「どういうことか、またそれはなぜか」のように複数の設問意図をまとめて出題することも多いが、問われた順番に答えてゆくと制限字数を無駄にしかねない。前提条件は先にまわして、一文にまとめることを勧める。

なお、問題文には登場人物が三人いる。「だれのことか」などと直接的に言われなくても、読解の正確さをアピールするために主体の説明を簡潔に補っておくことは、答案作成上の基本的なマナーだと言えよう。

(三) 傍線部を品詞分解すると、「あふ（動詞）＋こと（名詞）＋な（形容詞語幹）＋み（接尾辞）＋に（格助詞）＋み（名詞）＋を（格助詞）＋つくし（動詞）＋つつ（接続助詞）」となる。

右を無理やり漢字表記すれば「逢ふ事無みに身を尽くしつつ」となるが、「訳註」に示したとおり、「なみ」に「波」を、「みをつくし」に「漑標」を掛けるのは和歌の常套手段である。設問にも「表現の工夫に注意して」とあることから、この《掛詞》を無視すると減点は大きなものになると心得るべきだろう。（和歌の修辞技巧のうち、《掛詞》（および《枕詞》）はほとんど暗記事項と言ってもよい。《掛詞》については参考書類を使って代表的なものを憶えておくことを勧めたい。）

文法的な注意点としては、『形容詞語幹＋「み」』の形に注意して「ゝなので」などと前提・理由の形で訳出することがもったもなきポイントとなる。

また、接続助詞「つつ」は、古文では基本的に『反復・継続』のニュアンスで用いられることが多い。現代語では『同時並行』の用法が一般的なので盲点になりやすい。ここでも、対応する「本（＝上の句）」に「朽ちはてん」と「死」を暗示する表現があるから、『同時並行』では不自然である。

さて、「みをつくし」だが、まずは「身を尽くし」の意味から考えると、これは「身も心も悩みにとらわれてどうしようもないさま」を言う。一方の「漚標」は「水脈^みつ串」の意で、河口付近などに航路を示すために立てられる杭のことを言い、難波^{なみ}・淀川河口のものが有名。「水にひたされている」ことが「身を尽くし」に通じて、ほぼ常に『掛詞』となる。和歌には恋を詠ったものが多く、「あふことなみに……みをつくし」とあれば、通常なら「恋しい人に逢うことができないから辛くて辛くてしかたがない」といった意味に用いられることになるのだが、それを知らないほうがえってここでは解釈しやすかったかもしれない。というのも、右に見たように、この句は「漁師の老人はどんな縁で殺生に明け暮れながらどこの入り江で死んでゆくのか」という上の句に対応するのだから、「あふこと」ができなかったのはむしろ「仏縁」ということになるわけだ。

老漁師の付け句に西行が感動したのは、西行としては和歌の世界での常識である「かなわぬ恋の苦悩」を思い浮かべながら、場の状況から「仏縁に恵まれない庶民の苦悩」にも解釈できる句だったからだろう。しかし、ここでは「仏縁に恵まれない庶民の苦悩」が歌意の本流を構成するのだから、設問の制限字数に鑑みれば、恋情云々に触れることまでは要求されていないと考えてよい。そのうえで、「なみ・みをつくし」の『掛詞』の意味がそれぞれふたつずつ答案中に表現されていれば十分である。

(四) 「かかる」は指示副詞「かく」にラ変動詞「あり」が熟合した「かかり」の連体形で、「このような」の意。その指示対象については、被修飾語の意味を考えることで明らかにするはずだから、ひとまず措く。

「覚えぬ」は「思ふ」の自発態「おぼゆ」の打消表現であるから、「自然にそのように思われたわけではない」つまり「思いがけない」ということだと考える。

「こと」には文脈によって様々な漢字をあてることができる。多いのは「言・異・殊」で、また「琴・毎」の場合もある。「事」もあるが、形式名詞の場合は省略されることも多いので、実際は現代語ほどには多くない。ここでは傍線部直後の動詞の《客語（＝直

接目的語』となっていることから名詞だとわかり、和歌にまつわる話題の中で「聞く」という動詞とともに用いられているのだから「言」和歌の句」と判断するのが妥当である。

とすると、「かかる……こと」は「いま耳にしたばかりの……句」程度の意味合いで、具体的には「あふことなみにみをつくしつづ」を指したものであることになる。それが西行にとって「思いがけない」のはなぜか、という設問である。「思いがけない」とは「予想に反する」ということだから、句を聞く前後の相違に注目すればよい。前問で考えたことも大きなヒントになるはずだ。

さて、「あふことなみに」の句を聞くまでは、この漁師は西行にしてみれば別段まえから知っていた人でもなく、「殺生に明け暮れる無教養なじいさん」に見えていた。ところが、(少なくとも「付け句」をしようと思いつく程度には)歌の心得のある(ということが読みとれる)「西山の上人」＝「都の教養人」よりも早く、「田舎の漁師」が「和歌の作法を踏まえているのみならず、それを自分に引きつけてひとひねりした句」を出してきたのである。その結果としての感情が「めづらかに覚えて」という表現に現われているのだから、これは端的には「驚き」でよからう。あとは、解答欄の制限字数に合わせて右に述べたことをまとめればよい。採点の着眼点としては、「西行が句の詠み手を見くびってしまうことになった、詠み手の属性」・「出された句の秀逸な点の説明」・「驚き」という三点に分割されることになる。

【配点の目安】 配点45点 (一) 18点 (ア 4点 イ 8点 カ 6点) (二) 8点 (三) 8点 (四) 11点

ア (一)

〈ア多くの魚がウなんとイ痛ましいウことよ〉…4点

〈別解〉ウなんとまあア魚たちがイかわいそうウなことではないか〉

※ア1点、イ1点、ウ2点

*アは〈無慙〉とする対象を「(難波の海で釣られている)魚(たち)」と補足していれば可

*イは〈無慙〉を「痛ましい・かわいそう」と訳していれば可

*ウは詠嘆の訳出ができていれば可

イ

〈アあなたがたがイ私の舟にウお乗りになってもエお役には立ちません〉…8点

※ア1点、イ1点、ウ3点、エ3点

*アは〈乗る〉の主語を「あなた達」と補っていれば可

*イは〈乗る〉の対象を「私の舟」と補っていれば可

*ウは〈乗りたまひて〉を「乗る」+尊敬+逆接仮定で訳していれば可

*エは〈何の用か侍らん〉を「役に立つ」+反語+丁寧で訳していれば可

カ

〈ア漁師の仕事もウなんともイ忙しいウ俗世の生業に過ぎないことだ〉…6点

※ア2点、イ2点、ウ2点

*アは、〈海人のしわざも〉を「漁師の仕事も」と訳していれば可

*イは、〈いとまなの〉を「忙しい」と訳していれば可

*ウは〈世や〉を「人生」+詠嘆で訳していれば可

(二)

〈ア西行の句に付け句をするために、イ西住上人がウしきりに考え込んでいるということ〉…8点

※ア3点、イ2点、ウ3点

*アは〈打ちうめきける〉の理由を「西行の句に付け句するため」と補っていれば可

*イは〈打ちうめきける〉の主語を「西住上人」と補っていれば可

*ウは〈打ちうめきける〉の意味を「すっかり考え込んでいる」ととらえていれば可

(三)

〈ア仏縁に出会うこともイないので、オ難波の落標ではないが、ウ波間にエ身を沈めて俗世の苦しみをすべて味わい味わいは〉

…8点

〈別解〉ア仏縁に逢うこともできイないので、ウ波間のオ落標のように、エ我が身をいたずらに滅ぼしていつて

※ア2点、イ2点、ウ1点、エ2点、オ1点

*アは〈あふこと〉の対象を補って「仏縁に出会わ(ない)」と訳していれば可

*イは〈なみに〉を「無い」+前提・理由で訳していれば可

*ウはイに「波」が掛けられていることを補っていれば可

*エは〈みをつくしつづ〉を「身心ともに悩む」+反復・継続で訳していれば可

*オはエに「落標」が掛けられていることを補っていれば可

(四)

〈イたまたま乗り込んだ舟のア老いた漁師が、ウ修辞技巧を駆使した付け句をするほどのア連歌の素養を備えていたことにエ驚いたから〉…11点

※ア3点、イ2点、ウ3点、エ3点

*アは老漁師の連歌の素養を押さえれば可

*イはアの「漁師」に舟で偶然会ったことを押さえれば可

*ウはアを「修辞技巧を駆使した付け句ができる」と補っていれば可

*エはアまたはウへの驚きを押さえれば可



会員番号	
------	--

氏 名	
-----	--